

群馬県送出の満蒙開拓青少年義勇軍（佐俣中隊）の体験

—小俣喜一郎氏の事例—

Experiences of Emigration of Youth Troops to Manchuria-Mongolia Areas
from Gunma Prefecture (Samata Company):
Case of Mr. Kiichiro Omata

太田 満¹⁾
Mitsuru OTA

概要

本稿では、佐俣中隊に所属した、小俣喜一郎氏のライフヒストリーを取り上げ、群馬県送出の満蒙開拓青少年義勇軍に入隊する背景や過程、入隊後や敗戦時、敗戦後の義勇軍の様子について明らかにする。満蒙開拓青少年義勇軍とは、数え年16～19歳の訓練を受けた青少年が、「満州」（現：中国東北地方）に渡り、現地の開拓と軍事的補完を担うことを期待された集団である。群馬県からは19の義勇軍が送出され、その送出数は1,609人とされている。義勇軍の体験を一部掲載した最新の記録としては、群馬県拓友協会が2004年に発行した『群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌 希望に満ちた満蒙開拓と終戦』がある。だが、群馬県が送出した義勇軍入隊者の体験を包括的に記した記録はなく、義勇軍体験は、今なお「語られない戦争・戦後体験」の一つである。戦後、義勇軍の体験を語られる状況になかった時に、当時の状況や思いを綴った書物が作成され、戦後74年経った今、その書物もまた脚光を浴びることなく埋もれようとしている。当時の体験を語れる人も少なくなっており、義勇軍の歴史を記録に残す作業が求められている。

キーワード：満蒙開拓青少年義勇軍，群馬県，佐俣中隊，小俣喜一郎氏，

Abstract

In this article, we will discuss the life history of Mr. Kiichiro Omata who was in the Samata Company, the background and process of joining the Emigration of Youth Troops to Manchuria-Mongolia Areas from Gunma Prefecture, and the statement after the war. Emigration of Youth Troops to Manchuria-Mongolia Areas are groups that has been expected that 16 to 19 years old's young people who have been trained were responsible for local development and military complementation in the Manchuria (currently Northeast China). 19 militia forces have been sent from Gunma Prefecture, and the number of them is said to be 1,609. The latest record that includes the Samata Company is "The 30th Anniversary Commemorative Magazine", other than that, there is no document that comprehensively describes the experience of the Emigration of Youth Troops to Manchuria-Mongolia Areas from Gunma Prefecture. Their experiences are still one of the story nobody knows. After the war, they could not talk about the experience of the Emigration of Youth Troops to Manchuria-Mongolia Areas for a long time, and the book is going to be buried without getting in the spotlight. Now that fewer people are able to talk about their experiences, we need to record the history of the Emigration of Youth Troops to Manchuria-Mongolia Areas.

Keywords: Emigration of Youth Troops to Manchuria-Mongolia Areas, Gunma Prefecture, Samata Company, Mr. Kiichirou Omata

¹⁾ 共栄大学 教育学部

1. はじめに

満蒙開拓青少年義勇軍（以下「義勇軍」とは、「中国東北地方を入植地として日本国政府が実施した移民の一形態」（白取：2008）であり、数え年16～19歳の訓練を受けた青少年が、「満州」（現：中国東北地方）に渡り、現地の開拓と軍事的補完を担うことを期待された集団である。義勇軍の募集は、1938年3月に始まり、1945年までの義勇軍送出数は、86,530人にのぼる（満洲開拓史刊行会：1961）。各道府県で採用された応募者は、「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」（茨城県内原に位置したことから「内原訓練所」ともいわれる）において、軍隊に模した隊組織に編成された。そして、2～3ヵ月の訓練を経て満州国に渡り、「満州国」内に散在する「満洲開拓青年義勇隊訓練所」での訓練を経て、訓練時の中隊（300名程度）を基礎とし、「義勇隊開拓団」として入植した。

「満蒙開拓青少年義勇軍」という呼称は、前年の1937年11月に政府に提出された「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」（以下「建白書」）から使われ始めた。1937年に日中戦争が起こると、関東軍は「青年農民訓練所」の設置を決めた。「青年農民訓練所」とは、数え年16歳から19歳の男子を集めて収容し、一年以上の訓練後、集団移民等として独立させ、必要に応じて各移民の基幹員を養成する訓練所である。この「青年農民訓練所」創設に呼応し、制度化を求めたのが、先の建白書である。

義勇軍の呼称について、拓務省は当初、消極的であった。なぜなら、予算編成上の不都合があり、外交上軍隊派遣の印象を与えかねなかったからである。そこで拓務省は「青年開拓民」という呼び名を使用したが、国内の青少年のよびかけには「義勇軍」の方がよいとされ、国内向けの募集に使用されるようになった。だが、関東軍には「義勇軍」という呼称に対する異論があったため、満洲では「満洲開拓青年義勇隊」や「義勇隊開拓団」といわれた。

1938年3月の募集より、群馬県の青少年は義勇軍に参加している。群馬県が送出した満蒙開拓青少年義勇軍（義勇隊開拓団）は、以下の通りである。

表1 群馬県が送出した満蒙開拓青少年義勇軍（義勇隊開拓団）一覧

	回数	隊名	渡満先
1	第一次	老琥 義勇隊開拓団	北安省嫩江県老琥溝
2	同	竜頭 義勇隊開拓団	東安省宝清県竜頭
3	同	虎山 義勇隊開拓団	東安省林口県虎山
4	同	万竜 義勇隊開拓団	東安省勃利県万竜
5	同	昭光 義勇隊開拓団	吉林省敦化县昭光屯
6	同	尚家 義勇隊開拓団	浜江省肇東県尚家
7	第二次	牙克石義勇隊開拓団	興安省索倫旗牙克石
8	同	小興凱義勇隊開拓団	東安省蜜山県馬家崗村
9	同	共栄 義勇隊開拓団	北安省嫩江県座虎灘
10	同	昭北 義勇隊開拓団	北安省綏稜県安古鎮
11	同	竜湖 義勇隊開拓団	東安省勃利県七台河村
12	同	瑞代 義勇隊開拓団	浜江省葦河県華安
13	第三次	神利 義勇隊開拓団	浜江省五常県南冲河
14	同	南台子義勇隊開拓団	吉林省敦化县黑石村
15	同	照国 義勇隊開拓団	黒河省孫克県哈拉氣口子
16	第四次	大利根義勇隊開拓団	北安省慶安県中欧根
17	第五次	揚家 義勇隊開拓団	北安省嫩江県揚家
18	第六次	鐵驢 義勇隊訓練所佐俣中隊	北安省慶安県鐵驢
19	第七次	孫呉 義勇隊訓練所鴨下中隊	黒河省孫呉県孫呉

※群馬満蒙拓殖之塔建立三十周年記念誌編纂委員会編（2004：410-411）に基づき一部を書き直して筆者作成

表にある回数とは、募集開始年を起点とする回数である。1938年（昭和13年）に入隊した者を第一次とし、第二次は1939年、第三次は1940年、第四次は1941年、第五次は1942年、第六次は1943年、第七次は1944年の入隊者である。群馬県に第八次はないが、他県では第八次の義勇軍もある。満洲開拓史刊行会（1961）によると、1947年8月15日の時点で、群馬県の義勇軍送出数は1,609人となっている。これら全ての義勇軍の概要については、『拓魂ぐんま』（1974年発行）に紹介されているが、義勇軍の体験を掲載した最新の記録としては、群馬県拓友協会が2004年に発行した『群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌 希望に満ちた満蒙開拓と終戦』（以下、『三十周年記念誌』）がある。『三十周年記念誌』には、表1にある19の義勇軍のうち、12の義勇軍の記録（隊員の出身道府県、内原訓練所入所年月日、渡満年や渡満状況、敗戦後の状況など）がある。全ての義勇軍の記録がないのは、「原稿が集まらなかったから」¹⁾とのことだが、戦後、約60年経つと、全ての記録が揃わなくなることが窺い知れる。『三十周年記念誌』には、以下の義勇軍の記録が、各隊に所属した執筆者名と共に収められている（表2参照）。

表2 『三十周年記念誌』に掲載された義勇軍の記録

回数	隊名	執筆者	隊員の出身道府県	内原入所年月日
第一次	老成義勇隊開拓団	本多嘉義	群馬、新潟、福島	1938年（昭和13年）2月11日
第一次	竜頭義勇隊開拓団	近藤朋三郎	群馬、香川、静岡、石川、大阪	1938年（昭和13年）5月7日
第一次	虎山義勇隊開拓団	佐藤國治	群馬、秋田、静岡	1938年（昭和13年）5月7日
第一次	昭光義勇隊開拓団	星野吉朗	青森、福島、新潟、北海道、宮崎、岡山、広島、大阪、山口、徳島、熊本、神奈川、愛知、東京、千葉、茨城、栃木、静岡、宮城、群馬	1938年（昭和13年）9月21日 ²⁾
第一次	尚家義勇隊開拓団	小林大三郎	宮城、岩手、富山、大阪、岐阜、福島、静岡、広島、秋田、神奈川、長野、東京、山梨、徳島、千葉、石川、鹿児島、群馬、北海道	1938年（昭和13年）11月30日
第二次	牙克石義勇隊開拓団	鈴木豊吉	群馬、新潟、長野、高知、香川、熊本	1939年（昭和14年）2月3日
第二次	小興凱義勇隊開拓団	原田要・斎藤喜代八	群馬、栃木、佐賀、その他	1939年（昭和14年）4月10日
第三次	神利義勇隊開拓団	大谷吉三	富山、群馬	1940年（昭和15年）3月28・29日
第四次	大利根義勇隊開拓団	内川清	群馬	1941年（昭和16年）2月3日
第五次	揚家義勇隊開拓団	青木俊明、他	群馬、愛知 ³⁾	1942年（昭和17年）3月6日
第六次	鐵驢義勇隊訓練所佐俣中隊	清水雄太郎	群馬、埼玉	1943年（昭和18年）3月5日
第七次	孫呉義勇隊訓練所鴨下中隊	田畑登次郎	埼玉、群馬、茨城	1944年（昭和19年）3月20～23日

※群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌編集委員会編（2004）に基づき筆者作成

ところで、群馬県には、1968年に発足した「群馬県義勇軍連合会（元満洲開拓青年義勇隊 群馬県出身者親睦団体）」（以下「連合会」）がある⁴⁾。連合会会長の小俣喜一郎氏によると、現在、慰霊祭等に参加できる会員は、小俣氏を入れて3名である。つまり、表2にある、第四次の利根義勇隊開拓団の長井竹男氏（現：群馬県拓友協会会長）、第五次の揚家義勇隊開拓団の星野輝義氏、第六次の鐵驢義勇隊訓練所佐俣中隊（以下「佐俣中隊」）の小俣喜一郎氏である。三氏は90歳を超えており、他の会員は、施設に入られたり、すでに亡くなられたりしているという。小俣氏によると、会合には3人しか集まらず、会の収入よりも支出の方が大きいことなどから、義勇軍連合会は「来年度で解散するかもしれない」と話している⁵⁾。それほどに連合会の維持は難しく、現実に解散すれば、義勇軍体験の継承は一層困難になると思われる。

また、「連合会」の他に、義勇軍入隊者は戦後、それぞれの会を発足している。例えば、長井氏が所属した「大利根義勇隊開拓団」は「大利根同志会」を、星野氏が所属した揚家義勇隊開拓団は「北桜会」を、小俣氏が所属した佐俣中隊は「鐵驢拓友会」を発足している。各会が編集し、発行した書物はあるが、それらは、会の中で読まれる程度で、外部に出回ることほとんどなく、知られざる資料となっている。

義勇軍体験の継承という点でいえば、第四次利根義勇隊開拓団については、長井氏が編集委員長となってまとめた、大利根同志会編『曠野消えた青春 満蒙開拓青少年義勇軍 群馬根岸中隊』（1995年、上毛新聞社）（以下『曠野に消えた青春』）が刊行されている。同書は上毛出版文化章を受章し、地域に広く知られるようになったが、他の義勇軍の体験については、『三十周年記念誌』に頼らざるを得ない。また、『三十周年記念誌』にしても、『曠野に消えた青春』にしても、我々（隊全体）を主語にした記述はあっても、個人を主語にした体験記述はあまり見当たらない。あっても断片的な記述にとどまっており、群馬県送の義勇軍が、隊員各個人に与えた影響の全体像をつかむことは難しい状況である。

加えて、小俣氏も長井氏も、異口同音に話すのは「長い間、義勇軍に行っていたことは口にはできなかった」ということである。「なんとなくそういう雰囲気であり」（小俣氏）、「行くときは万歳、万歳と言って送られていった」のに、「義勇軍に行っていたといえば、あれは貧乏人だったから」（長井氏）などと中傷されることがあったからだという⁶⁾。現在は義勇軍の体験について口にすることはできても、聞かれれば答える程度で、自分から言うことはない。その意味では、義勇軍体験とは、今なお「知られざる戦争・戦後体験」であり、「語られることの少ない戦争・戦後体験」だといえる。

そこで、本稿では、佐俣中隊（戦後の「鐵驪拓友会」）に所属した、小俣喜一郎氏のライフヒストリー取り上げ、義勇軍に入隊する背景や過程、入隊後や敗戦時、敗戦後の様子、そして、日本に引き揚げてからの様子を整理し、小俣氏を通して義勇軍体験の全体像を明らかにする。小俣氏は、鐵驪拓友会が編集した『拓友（佐俣中隊の記録）』（1965年、非売品）や『満洲開拓青年義勇隊 佐俣中隊写真集 ぼんゆう（朋友）』（1982年、非売品）に、佐俣中隊の体験を寄稿したり、自身の写真を送ったりしている。だが、小俣氏の生い立ちから現在にいたるライフヒストリーについてはこれまで語られたことはなく、文字化もされていない。そこで、本稿では、刊行された佐俣中隊の情報を整理した上で、小俣氏に聞き取りを行い、それを小俣氏のライフヒストリーとしてまとめ、群馬県が送出した満蒙開拓青少年義勇軍の一端を明らかにする。小俣氏同様、先述の長井竹男氏、星野輝義氏は、現在聞き取りのできる重要な人物であり、本稿では、両氏からの聞き取り内容は、小俣氏の体験を理解する手がかりとして活用する。

2. 佐俣中隊の概要と小俣氏の見聞・体験記

本章では、現在入手・閲覧することのできる佐俣中隊に関する出版物を挙げ、その中に記載された佐俣中隊の概要を紹介する。また、小俣氏が記述した見聞・体験記についても紹介する。

2.1 佐俣中隊に関する出版物

佐俣中隊に関する出版物として、管見の限り、以下のものが挙げられる。

表3 佐俣中隊に関する出版物

	発行年	書名	編集	出版社・発行元	備考
1	1965年	拓友（佐俣中隊の記録）	鐵驪拓友会	無記名	非売品・小俣氏所蔵
2	1974年	群馬県復員援護史	群馬県県民生活部世話課	群馬県	群馬県拓友協会所蔵
3	1974年	拓魂ぐんま	群馬満蒙拓魂之塔編集委員会	群馬満蒙拓魂之塔建立委員会	群馬県拓友協会所蔵 （元々は星野氏所蔵）
4	1982年	満洲開拓青年義勇隊 佐俣中隊写真集（非売品）	鐵驪拓友会	無記名	非売品・小俣氏所蔵
5	1984年	新編 埼玉県史別冊 曠野の夕日 埼玉県満蒙開拓青少年義勇軍の悲劇	埼玉県県民部 県史編さん室	埼玉県史刊行協力会	
6	2004年	『群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌 希望に満ちた満蒙開拓と終戦』	群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌編集委員会	群馬拓友協会	群馬県拓友協会所蔵

1965年に出版された『拓友（佐俣中隊の記録）』は、「佐俣中隊のあゆみ—その栄光と終焉」,「佐俣中隊つれづれ草=回想集集=」,「鉄驪拓友会活動記録」,「鉄驪の花=物故隊員追悼記=」,「附録」等からなる。「佐俣中隊のあゆみ—その栄光と終焉」の中の「アミーバ日記」は小俣氏が寄稿するなど、同書の原稿及び資料提供に、小俣氏は関わっている。

1974年に出版された『群馬県復員援護史』は、「第1章 軍人軍属の復員および在外邦人の引揚」,「第2章 戦没者の状況および慰霊顕彰」,「第3章 戦傷病者戦没者遺族等の援護」,「第4章 旧軍人軍属の処遇」,「第5章 援護関係団体」,「資料編」からなり、佐俣中隊に関わることとして、第5章の「10 群馬県義勇軍連合会」に若干の記載がある。

1974年に出版された『拓魂ぐんま』は、「拓魂之塔によせて」「拓魂之塔建立にあたって」「供養のことば」「慰霊のことば」「建立経過のあらまし」「群馬県満蒙拓魂之塔建立事業実行予算書」「群馬県満蒙拓魂之塔建立委員会役員表」「民族の悲劇満洲開拓」「群馬県開拓団義勇隊送出引揚概況表」「群馬県送出開拓団義勇隊の概況」「群馬県満蒙拓魂之塔合祀者名簿」「群馬県満蒙拓魂之塔賛同者芳名」「編集後記」「ふろく」からなる。「群馬県送出開拓団義勇隊の概況」に「40. 鉄驪義勇隊訓練所佐俣中隊」に関する記述がある。（後述の2.2参照）

1982年に出版された『満洲開拓青年義勇隊 佐俣中隊写真集』は、佐俣中隊に所属する隊員の写真集であり、同写真集には小俣氏の少年時代の写真等が掲載されている。（後述の3.参照）

1984年に出版された『新編 埼玉県史別冊 曠野の夕日 埼玉県満蒙開拓青少年義勇軍の悲劇』は、満蒙開拓青少年義勇軍の概要や、埼玉県の義勇軍の概要、義勇軍関係者の証言が記されている。佐俣中隊に関わるものとして、「鉄驪3カ年の回顧」,「班長候補教育を修了して渡満」がある。

2004年に出版された『三十周年記念誌』は、「拓魂之塔」「巻頭言」「群馬県満蒙拓魂之塔建立三十周年記念式典」「開拓団・義勇隊の記録」等からなり、「開拓団・義勇隊の記録」の中に鉄驪義勇隊訓練所佐俣中隊に関する記載がある（後述の2.2参照）。

2.2 佐俣中隊の概要

佐俣中隊とは、群馬県出身の佐俣博氏を隊長に編成された中隊のことである。佐俣中隊の概要については、『拓魂ぐんま』と『三十周年記念誌』において紹介されている。そこで、両書に記載された内容を以下に紹介する。

まず、『拓魂ぐんま』（44頁）には、次のように記されている。

第六次鉄驪訓練所佐俣中隊は県出身佐俣博氏を隊長に二四一名を以って編成され、内一二六名が群馬出身者であった。昭和十八年三月内原入所二カ月半の訓練ののち内原出発伊勢神宮を参拝し新潟北鮮航路をとり牡丹江經由し鉄驪訓練所に入所した。

訓練所は現地五大訓練所の一つで綏佳線鉄山包北方二軒にあり、日ソ開戦時十三箇中隊役二五〇〇名居り中隊は家族四名、寮母一名を含め総勢一八四名で、他に応召二〇名、隊外派遣八名が在籍した。

終戦後不時の事態に備え万全の準備を整えていたが、八月二十二日現地治安維持会の武装解除を受けた。しかし、訓練所は暴民襲撃の的となり、絶えず小ぜり合いが続いた。又一般邦人附近開拓団員の避難者も多く、九月中旬にはその数七、〇〇〇名に達し、邦人の安全を護る為進駐のソ連軍に実情を訴えその庇護を求めてソ連軍の警備下に入り、ようやくして暴民の襲撃を免れ得たのである。

九月下旬から南下が認められ、九月二十五日第四陣に一、五〇〇名の一隊として鉄山包駅出発、二十九日長春到着大房身陸軍官舎跡に約1カ月間滞在した。此の間軍応召中の富田指導員が梅河において召集解除となり中隊に合流した。

十月十二日隊員一六二名は四平に南下到着し、中共軍に留用され、西安炭鉱において採炭作業に従事すること約十ヵ月、二十一年七月二十二日留用を解かれ、残留三十名を残して四平を出発、七月二十九日葫蘆島に到着、錦西満鉄官舎に宿営し、八月五日乗船六日葫蘆島出港し、八月九日博多に入港したが、チフスの集団発生のため上陸出来ず、佐世保港に回航、八月二十五日同港に上陸帰郷した。

此の間西安炭鉱において七名の犠牲者を出した。なお、西安に残留した三十名も二十一年九月全員帰国することができた。

次に『三十周年記念誌』には、以下のように記されている (387-389 頁)。以下に表 4 として記す。

表 4 『三十周年記念誌』における佐俣中隊の記載内容

項目	記載事項
隊員県別数	群馬県 151 名, 埼玉県 124 名, 送出時 275 名, 五小隊編成となる。
内原訓練所 入所年月日	昭和 18 年 3 月 5 日。当日の午前, 県内各地より前橋市立中川小学校に終結, 県主催び壮行式後, 内原訓練所に向け出発。 入所後 3 月 31 日埼玉中隊と合併, 幹部先生五名, 隊員 275 名, 5 個小隊に編成される。
渡満年月日	昭和 18 年 5 月 21 日, 壮行式。午後 3 時内原を出发, 午後 6 時東京着, 宮城遥拝, 駅前にて肉親との最後の面会を行い, 伊勢神宮に向かう。 5 月 23 日, 新潟開拓会館にて休養。 24 日, 女学生の唄「土の戦士に送る歌」に送られながら新潟を月山丸にて出港。 26 日, 朝鮮の羅津港着。 29 日, 羅津発, ハルピンを経て鐵驪に向かう, 6 月 1 日鐵山包駅着, 漸く鐵驪訓練所に着く。 6 月 3 日, 入所式。 10 月 16 日, 十五中隊より事情ありて六中隊に移行する。鞍山製鉄所使役, 松根油採集等。
終戦時の状況	昭和 20 年 8 月 23 日, ソ連軍侵入, 武装解除。その後はソ連軍使役, 鉄道警備等を経て, 引揚開始。 9 月 23 日, 新京にて列車動かず。大房身に収容される, ここでも帰国のメド立たず。 10 月 12 日, 新京を出て西安に向かう。 15 日, 陝西省西安県西安炭鉱に着く。 昭和 21 年 8 月 4 日, 帰国開始, 1 次, 2 次の編成で出発し, 第一次の者はコロ島で更に二班に分かれる, 残った者は軍の使役に着く。 8 月 15 日, 博多港へ着くも赤痢が発生し, 佐世保港へまわることが上陸停止。 9 月 27 日, 上陸本土の土を踏む。 9 月 31 日, 第一次帰国者故郷へ着く。 10 月 8 日, 八路軍参加者帰る。 14 日, 二次帰国者帰る。

2.3 小俣氏の見聞・体験記

小俣氏は『拓友 (佐俣中隊の記録)』において、「アミーバ日記 (手帳の中より)」と題する以下の文章を記している。

気候風土の極度に異なる北満鉄麗に、一度に幾百人もが集団移住したのだから、病人も出た。入所当時は、連日高りゃん飯に「アカザ」の汁、アカザの浸し、赤茶色をしたまずい湯、レンガ色の水、三大隊附近は、土質のせいか、特に水質が悪い。内地の美味い井戸水が恋しくなる。冷たい井戸水を、喉が痛くなる位呑んで見たいと、誰もが夢にまで見たのも不思議ではない。「内地の水と同じだ」などと言って、湿地帯の溜り水をがぶがぶ飲む、これで病気をしないのがおかしい位だ。夏も半ばに入った頃、中隊の半数位がアミーバ赤痢にやられ病床に臥した。高熱と、ひどい下痢で、見る見るやせて行く。今日も大車で数人の者が病院に運ばれて行った。そして今日も一。大車では間に合わずトラックで運ばれた。中隊員はだんだん少くなる。何時の間にか佐俣中隊には鉄訓一番の保護中隊という異名がつけられた。一入所第一年目、わが中隊は、先づ、次々襲いかかる病魔の試煉に打ち勝たねばならなかった。

気候風土の激変に加えて、やがて生徒の中に悪性下痢で倒れる者が祖駆出した。いわゆる風土病のアミーバ赤痢にやられるのだ。アミーバ赤痢というのは、普通の下痢と大して変わらないのだが、重態になると粘液便や血便が出て、身体が極度に衰弱するのである。日常の食料も十分でない上に質的な急変はひ弱な者にとっては致命的な打撃だったのかと、今にして考えさせられる。寒気が迫る頃に体力不十分な者は初めての凍傷に見舞われる。加えて洗濯不十分はシラミの温床となり、そして次々と倒れていった。食料、薬品、医者、看護施設のすべてが十分ならざる上、更に大きな痛手は、倒れても肉親が居ない淋しさであり、これが病人の回復を大きく後退させた。そし

て還らぬ同志は三人、五人と増えて行く。温和な中隊長以下幹部一同、為す術を知らず、今考えればキツイ批判の矢面に立たされなければならないだろう。だが当時の私達として、続発する病人の看護対策のみならず、上からの命令にも服さねばならぬ。開墾、営農の作業も続けざるを得ない。キツイ昼間の労働に、夜は病人の見廻りなど、二十四時間の勤務態勢では身体の続くはずがない。上からの要請と、下からの責任感とで、幹部五人、全く放心虚脱の時もあった。大隊長以下、大隊幹部の力強い指導もあったが、訓練所一番の保護中隊の汚名を甘受せざるを得なかったのもこの頃だったと思う。

この後、「不死鳥の如くに」と題する文章が続き（著者不明）、訓練生が成長し、代表が銃剣術の大会で優勝し、病弱佐俣中隊のレッテルがなくなり、「鉄訓に佐俣中隊あり」という自信がもてたこと、開拓団に移行する矢先に終戦を迎えたことが記されている。

3. 小俣喜一郎氏のライフヒストリー

本章では、小俣氏から聞き取った内容を本人による一連の語りになるように構成したものを以下に示す⁷⁾。そのようにしたのは、小・中学生にも読みやすいように、学校教育等での活用を見越してのことである。なお、聞き取った内容については、「義勇軍入隊のきっかけ」、「内原訓練所での様子」、「内原訓練所を出て満洲に渡るまで」、「現地訓練所での様子」、「敗戦時の様子」、「日本に帰国するまで」、「帰国後の暮らし」、「私にとっての義勇軍体験」に分けると共に、長井氏や星野氏からの聞き取りや佐俣中隊に関わる文献等と照らし合わせて紹介する。

3.1 義勇軍入隊のきっかけ

私は昭和4年(1929年)1月に生まれました。私の親は、石屋(石の加工業)をしていました。兄弟は11人いました。私は3番目の子どもで、三男でした。私の家は、碓氷郡八幡村にあって、借家に住んでいました。暮らしは、楽ではありませんでした。私が小学校にあがる時には、私の下には3人の弟妹がいました。子だくさんの家でした。

満洲に行くことにしたのは、先生の宣伝がうまかったからです。満洲に行けば、一人十町歩もらえます。先生から「お前の家は兄弟がたくさんいるから、行った方がいい」といわれて、その気になりました。私の学校からは、私を含めて3人が満洲に渡りました。両親からは、頑張ってこいと言われました。また、兵隊さんからも、満洲はいい所だぞと言われてその気になりました。私は当時、小学校の高等科2年でしたし、情報は今のように入ってくるわけではありませんでしたので、西も東も分からないような状況でした。

私の通っていた小学校から、中学校に進学する仲間は2人ぐらいで、工場に勤めたり、農家を継いだりが大半でした。私は義勇軍に行くことにしましたので、昭和18年3月15日、卒業式もしないで、村を出ることにしました。その日、仲間が安中駅まで送ってくれました(写真1参照)。

小俣氏は、義勇軍入隊のきっかけとして、学校教員の「宣伝がうまかったこと」や、「『お前の家は兄弟がたくさんいるから、行った方がいい』」といわれて、その気にな」ったことを述べている。義勇軍への入隊を勧めたのは、学校教員であることを改めて考えさせる事例である⁸⁾。長井氏や星野氏も同様に学校教員による働きかけで入隊を決めている⁹⁾。当時、クラスで級長を努めていた星野氏の場合、「先生も色々募集についての関係で大変なようだったし、級長だけはということだったから、級長だからだめですとはいえなかった」と話している。また、入隊の背景としては、小俣氏は11人兄弟で暮らしが楽ではなかったこと、長井氏の場合、10人兄弟で「貧乏百姓」だったこと、星野氏の場合、3人兄弟の長男だったが、「うちの農業の規模は小さいからどうしたものか考えていた」ことを話している。

3.2 内原訓練所での様子

内原訓練所では、3ヵ月を過ごしました。寝泊まりは、日輪兵舎でしました(写真2参照)。日輪兵舎は、45人ぐらいが入り、1階と2階があって、頭を中心に向着て、寝起きしていました。最初は群馬の人間だけで寝泊まりしていましたが、のちに埼玉の人も一緒に寝泊まりしました。群馬の人間と埼玉の人間とがけんかをしたり、いじめたりということはありませんでした。満洲に行って増産するんだという目的をもっていましたからね。当時来ていた服は、兵隊のような服でした。でも、兵隊は5つボタンで、義勇軍は4つボタンでした。兵隊と同じような服を着て過ごしていましたが、夜になると、それを脱いで、下着で寝ていました。朝になると起床ラッパがなります。「おきろよ、おきろよ、みなおきろ、起きなきゃ、隊長さんに叱られる」と聞こえるようなラッパです。ラッパと共に起きて、身支度して、集合まで10分ぐらいしかありません。もたもたしてはいられませんでした。もたもたすれば、教練幹部に叱られます。教練幹部は、もともと学校の先生です。私たちの所属した中隊の中隊長も、元々は学校の先生でした。教練幹部の先生は、はりきっていました。私よりも10歳ぐらい上の先生でした。25歳ぐらいの先生だったと思います。訓練の時は、震え上がるような声で叫んでいました。

私たちのいた訓練所が、茨城にあったからだと思います。鰯と芋(里芋)がうんととれるからでしょうね、鰯と芋ばかりを食べていた記憶があります。初めは抵抗がありましたが、だんだんと慣れてきました。炊事当番は、あの当時は5~6人いたと思います。大きな鍋に具材を放り込んで、味付けもせず、芋なんか、ほとんど皮をむかず、毛がくっついている状態で入れていました。鰯はふかして、食べていました。決まった食器に盛り付けられましたが、食べないと訓練についていけませんでしたので、うまいも、まずいもなく、食べるしかありませんでした。

食べた後は、日本体操(やまとばたらき)という体操をしていました。その後は木刀の練習です。そして、駆け足。それから食糧増産のために、薩摩芋の苗間づくり。深さ50センチぐらい、長さ3メートルぐらい、幅1メートル50センチぐらいの松の葉っぱを踏んづけて、熱を出させて、その熱で薩摩芋の苗の芽を出すのですが、それを苗間づくりといいました。薩摩芋づくりの他は、今日はこれだといえば、これをする毎日で、訓練する日は、訓練ばかりしていました。鉄砲の代わりに鋤の柄を担いで、行進をしていました。その時は、なんで早く満洲に行かないのかと思っていました。いざ、満洲に行く日が近づくと、汽車に乗る訓練をしました。何でも訓練、訓練、訓練でした。

仲間の中には、満洲に行きたくない子もいました。特に家族に大事にされた子どもだったと思います。私は3男で15歳になっていました。その時には、私の下に5人ぐらいいましたから、そんなにお母さんが恋しいという気持ちはありませんでした。でも、中には一人っ子もいました。校長先生の子もだったと思います。その子は、満洲で病気にかかって死んでしまいました。

佐俣中隊は、群馬県と埼玉県の間で混成中隊である。埼玉県出身者からは、中隊長が群馬県出身者であることに不満があったことや中隊長に対する不信感から「幹部襲撃計画事件」が起こったことなどが、埼玉県民部史編さん室(1984)に記されている。聞き取りの中では、混成中隊であることから生じる問題等は語られていないが、義勇隊員の意識は不満も含めて様々であったことに留意する必要がある。

小俣氏の聞き取りでは、内原での訓練中、「満洲に行って増産するんだ」などの強い目的意識をもっていたことが語られている。日本のために、満洲のために、という心情は、当時の義勇軍入隊者が少なからず共有していたと考えられる。長井氏は、「国に忠、親に孝」の意識を強くもっていたこと、星野氏は、「一所懸命、お国のため」という意識をもっていたことを語っている。ただ、そうはいっても、小俣氏のいうように、「満洲に行きたくない子」もいたのであり、小学校高等科を卒業したばかりの子どもが、社会的理念と自分の置かれた環境とのギャップの中で生活していたことが窺える。

3.3 内原訓練所を出て満洲に渡るまで

内原を出る時は、故郷には戻らず、伊勢神宮を参拝し、京都を通過して、新潟港に行きました。新潟には、開拓会館がありました。そこに集合して、一晩泊まって、次の日の夕方に月山丸という船に乗って出発しました。240名ほどの義勇軍が乗船しましたが、それ以外の人間は乗っていませんでした。船に乗る前に、両親に会うことはありませんでした。渡満前に、内原で親との面会が許された時、私の親も会いに来ようとしてくれたことを、後の手紙

で知りましたが、電車に乗り遅れたらしく、会えませんでした。

船には一晩乗って、向こうについたのは、翌朝です。途中で機雷があったようで、船は止まり、機雷を除去することになりました。みんなが海をみて、「こわいなあ」と言い合っていました。船は小さく、とにかく日本海が荒れて、身体の弱い人は吐いて、えらい騒ぎでした。やがて、朝鮮半島の羅津に着き、その後、列車に乗って、カーテン下ろせという指示が出て、カーテンを下して進みました。途中、弁当が出ましたが、中身はあわのご飯でした。色がお米のご飯と違って、黄色っぽいような、口に入れるとパラパラしているようなご飯です。その時は初めて食べましたが、お腹も空いていたので夢中で食べました。夜になると、列車の中で寝ました。船の中で散々揺られ、ずっと列車の中にいたので、くたびれてしまって、通路で寝ていました。狭い所でも汚い所でも、みんなが横になって寝ました。

鐵山包という駅で、列車を降り、駅から目的地の訓練所までは、歩いて行きました。「ここはお国の三百里」と歌に励まされながら歩き続けました。声が出なくなると、「もっと声出せ」と教練幹部に怒鳴られて、歌を歌いました。3時間ぐらい歩いたと思います。身体の悪いものは馬車に乗せられましたが、着替えの入ったリュックを背負い、鍬の柄を担いで、歩ける者は、みんな歩いて行きました。

内原を出て満洲に渡るルートは、群馬県送出の義勇軍においても単一ではない。小俣氏は新潟港から出港したことを述べているが、長井氏や星野氏は下関から出港したことを述べている。共通するのは伊勢神宮の参拝である。小俣氏も長井氏も星野氏も伊勢神宮を参拝している。『曠野に消えた青春』には、「伊勢の皇大神宮に感激し、弥栄を唱え満州国に大和心を植え付けん」との記述（74頁）があるが、皇国精神を高める上で渡満前の伊勢神宮参拝が重視されていたと思われる。

3.4 現地訓練所での様子

ようやく訓練所の本部について休憩することができました（写真3参照）。休憩といっても、あぐらをかいて座るだけです。副所長の話を書くことになっていましたが、疲れきっていたので、何を話していたのかわかりません。

鐵驢に着いて、食堂に行ったら、赤い飯が並べられていました。「おい、赤飯だぜ」と嬉しがり、「食べていいぞ」と言われて食べてみたら、コウリャン飯でした。あれはひどかったです。よく磨いていない、玄米に近いコウリャン飯。真っ赤です。まずいというようなもんじゃありません。幾日もコーリャン飯が続くので、仲間は病気になるしました。私もおかしくなって、腹を下して、消化不良を起こしました。現地の中国人は、コーリャンを良く磨いて調理するので、わずかに赤く、桃色で、粘り気も出て、うまいんです。でも、義勇軍のコーリャンはよく磨かないので、大変でした。病人がたくさん出て、仲間の多くが痩せてしまったために、「栄養失調中隊」といわれました。その後は、白米に切り替えられて、身体を持ち直すことができました。

おかずは、ニシンに、じゃがいも、農場に行く帰りに、あかぎをつんで、あかぎの味噌汁を食べていました。お腹はいっぱいにはならないので、人の分まで食ってしまう仲間もいました。食われた仲間は、仕方がないので、炊事係から、おこげをもらってそれを食べていました。

満州では生水はぜったいに飲んではいけませんでした。満洲の生水は、井戸水で汲んだ時は、とてもきれいな水です。でも絶対に飲んではいけません。太陽にあてると間もなく、赤くなってきます。そして、ウーロン茶のような色になります。沸かすと、鉄のさびのようなものがみえますが、それでも、沸かせば飲んでも大丈夫です。私も、最初は沸かした水しか飲みませんでした。現地の生活に慣れてくると、生水を飲むようになり、その結果、お腹を下しましたが、次第にそれもなくなって、慣れてきました。

寝泊まりした家の屋根は、藁屋根でした。雨が降れば、雨漏りがして大変でした。雨の日は訓練がなく、鉄砲を磨いていました。鉄砲は一人一丁ありましたが、兵隊さんがさんざん使って、重心がくるったものばかりでした。それを、ばらして、きれいに磨いていました。銃弾はもたせてくれませんでした。実弾訓練は1年に1回やった程度です。鉄砲といっても5メートルぐらいとぶような鉄砲です。普段の晴れた日は、種まきをしていました。だいたい、ジャガイモ、トウモロコシ、大根の種を植えました。

寝泊まりしていた所には、ペーチカ（暖房）がありました。ペーチカがあっても、冬はとても寒かったです。ペーチカの火が消えてしまうことがあって、絶やさないようにしていました。当番が疲れて何もせず、火が消えてしまうこともありました。そうすると大変です。布団に入っている、息が出るところは霜ができてしまうぐらい寒かったです。凍傷になって、両足がなくなった仲間もいました。その子は、「俺は内地に帰るんだ」といって、訓練

所を脱走したのですが、途中で足が凍ってしまい、入院したものの手遅れでした。結局、その仲間は内地に帰されました。よっぽど帰りたいんだと思います。「おい、こんなところに居てられないぜ」といって、脱走した仲間もいましたが、結局、逃げて、遠くまでいけず、新京にすら行けず、訓練生の服でばれて、結局は義勇軍に引き渡される始末です。逃亡者は、1週間ぐらい、みたましずめで「お座り」をさせられました。私なんかは、兄弟が10人もいて、家に帰ってもしょうがないから、十町歩の土地をもらいたいという気持ちもあって、何とか頑張っていました。なので、脱走する気にはなれませんでした。

冬間は、本を読んだり、先生の教育を受けていました。中国語の授業もあって、中国の先生が教えてくれましたが、みんな一生懸命やっていませんでした。他に、歴代の天皇の名前や、軍人勅諭を言わせられたり、書くようにいわれたりなど、そういう勉強をしていました。

凍傷は、ちょっと凍る程度だったら、何とかありますが、見た目は、蠟のようになりました。特に、鼻が凍傷になりやすかったです。防寒帽をかぶっていても、あまりにも寒くて、凍傷になりやすかったです。「おい、凍傷にかかっているぞ」と言い合いました。冬は、寒いので、綿の入った防寒服、防寒靴をもらっても、外にいる時は、歩いてないと足が凍りつき、靴から足を出すことができませんでした。

夜はオオカミが出て、怖かったです。オオカミの被害にあった仲間はいませんでした。オオカミ対策は教わりませんでした。腹にしみわたるようなうーという鳴き声が、だんだん近くなってきます。歩哨に立ってても、鉄砲で撃ち殺すこともできません。鉄砲はあっても、弾は入っていないからです。ただ門の中に入って逃げるだけでした。銃をもっているから格好はいいのですが、格好だけでした。

訓練所の周りには、朝鮮人がいました。朝鮮部落がありました。交流はありませんでした。中国人は周りにはいませんでした。

『拓友（佐俣中隊の記録）』の中の「鉄麗風物誌」（73 - 103頁）においても、現地訓練所の様子が記されているが、上記は、現地訓練所の様子を衣食住に渡り、小俣氏の視点から全体的に語られたものである。なお、星野氏は、現地訓練所での教練は、内原訓練所の時よりも大変だったことを話しており、現地での暮らしは厳しいものがあったと思われる。

3.5 敗戦時の様子

私はその時は、山へ松根油の採取に行っていました。森林鉄道に乗って、10キロほど行った所です。油をしぼり、飛行機の潤滑油にすると聞きました。1945年（昭和20年）の4月か5月、各中隊から20、30名が呼ばれ、根っこほりをしていました。その前には、ぶどうのつるを茹でてしぼりました。通信関係に使ったと聞いています。

松根油採取の時に、けんかがありました。鹿児島中隊の人とのけんかです。なんでそういうことになったのか、わかりませんが、安山製鉄所に行った人が、鹿児島の人をいじめたので、鹿児島の連中が来て、お前らがうちの連中をいじめたと言って、包丁で刺し合う寸前まで行きました。けれども、先頭にいた仲間がいさめたので、そこまで行きませんでした。もうすでに我々は、17、8歳になっていましたので、ちょっとしたことで、血気盛んになってしまっていました。

松の木の根っこは使わずに終戦になりました。松根油の採取の堀から帰り、夕飯を食べている時に、「おい、明日は訓練所にけえるんだぜ（帰るんだぜ）」と言われました。でも、一時間立たないうちに「おい、今日けえるんだ」と言われました。それが13日の頃かな。それで夜に布団をまとめて、リュックを背負って、10キロ、15キロ先の駅まで、山を下りました。そしたら汽車がないと言われたのです。ずっと先に、汽車の後ろのライトが見えたので、そこまで追いかけてきました。そして一駅歩いて、その駅で列車に乗り込み、訓練所に着いたのは朝方です。そして、副所長の話がありました。副所長は、「日本は負けた。みなさんは牛でも馬でもあるものを全部食べて、玉砕だ」と言いました。おっかなかったです。玉砕という言葉始めて聞きました。身震いしました。どうやって死ぬのかなあと思いました。牛でも馬でもみんな食って、死ぬんだって、今もその言葉が残っています。

そういう話があって、しばらく生活をしていたら、ロシアの先遣隊が飛んできて、中隊幹部と話したのだと思いますが、間もなく帰って行きました。そして、9月になったら、ここを出て行くんだという話でした。着るものでも何でも持って帰ることになりました。糧秣倉庫にある食料は、保存がきくように、炒ったものにして、持てるだけ持っていけということになりました。中隊には、軽機関銃と50丁ぐらいの鉄砲はあったと思います。馬もいました。

けれども、それらを中国の兵隊（国民党）の城内（駐屯地）に収めに行きました。行く時には、石やつばを投げられました。今になって分からないけど、中国語でバカだなんだと言われたんじゃないかな。

その後、義勇軍は鉄砲をもってないからと、現地人間が襲撃に来るって話が出てきました。それで、こっちも負けてはられないから、竹やりを準備したんです。向こうは、鉄砲をもってわあわあ来ました。我々は、道の両脇で伏せて待ち、行けーの号令で飛び掛かって、追っ払いました。私たちが訓練を始めてから3年目だったので、強くなっていたんだと思います。もう「栄養失調中隊」ではありませんでした。けが人も出ませんでした。でも、夜は歩哨を10人ぐらい立てて寝ましたよ。途中、橋爪さんという名前の夫婦が義勇軍のところにやってきて、死のうと思ったけど、死ねなかったという話をして、道中を共にしました。

退去命令が出た後、列車が準備され、とにかく新京まで行けばなんとかなるといわれていましたが、ハルビンまでは普通の客車に乗って行きました。ハルビンに着くと、列車が動かなくなって、今度は無蓋車（屋根のない石炭を積む列車）で新京まで行きました。新京に着くと、来年まで日本に帰れないと聞き、新京の大房身という所に入りました。そこには電気も通っていて、10月までの1か月間ぐらいいたと思います。10月になると、このままでは食料もないし、暖房もないから、西安炭鉱に移ることになりました。開拓していた場所に比べると、南の方だったので、暖かかったです。雪が降ってもすぐに溶けるようなところでした。

この間の佐俣中隊の動きについては、『三十周年記念誌』（388-389頁）でも簡潔に伝えているが、松根油の採取や玉砕の話等については記されていない。上の語りは、小俣氏が体験した、敗戦前後の出来事である。

3.6 日本に帰国するまで

その炭鉱では、急斜面を100メートルぐらい降りて行って、石炭を集める仕事をしていました。その炭鉱では、不思議なことに、親方も技術者も日本人でした。トロッコを扱うのは中国人です。とにかく、地下に行く。地下に駅があって、その駅を通過して、また50メートルぐらい入って行って、そして、一トン詰めの車に石炭を詰め込む仕事をしていました。わずかだけど、給料もありました。賄いの先生がいたので、その先生にお金をわたし、やりくりしてたので、食べるものはありました。一時、国共内戦で、食料がなくなった時もありましたが、事務所の偉い人が中国の偉い人と話をして、モロコシの粉を食べることができた。それから、よく磨いたコーリャン飯を食べていた。給料の半分は自分のものになったので、自分たちでうんと安い豆腐などを買って食べていました。炭鉱だけで使うお金もありました。その頃、発疹チフスやコレラがはやって、亡くなった仲間がいました。私は病気にはかかりませんでした。

当時は、炭鉱住宅に入って過ごしていました。窓もしっかりとあって、30メートルぐらいある長屋で、そこに炊事場もあって、炊事当番専門家をつけていました。西安炭鉱に入って命が繋がったと思います。オンドルもペーチカもありましたし。みんな石炭をしょって帰り、オンドルで石炭をもして、暖かかったです。南京虫がオンドルに隠れていてね。夜になると出てきました。いっぱいいて、歩くのが早いんだよ。えらい目にありました。しらみもいました。でも、炭鉱だったから、お風呂があったんです。大衆浴場に毎日入れました。

西安炭鉱に入ったのは昭和20年10月、出たのは、昭和21年7月のことです。体力の弱い人などが、第一次帰国で帰られましたが、私も第一次で帰れました。当時は、早く帰りたいという思いはありませんでした。中国での生活にだんだん慣れてきたのかもしれない。「帰れるって、よかったなあ」程度でした。

葫蘆島では、一週間ぐらい船を待っていました。その後、信濃丸に乗りました。自分のことで精一杯で船の中の様子はあまり覚えていません。食事は出ました。さんざん食うほどではなかったですが、食事が出たからよかったです。船には10日間ぐらいいました。佐世保港にはついても、伝染病が出たということで、2週間ぐらい留め置かれました。中には頭がおかしくなってしまうて「おふくろがそこで待っているからいくで」といって出て行こうとする人もいました。船の中に幾日もおかれたためでしょう。私も、なんでこんなことをしているんだという気持ちになっていました。

西安炭鉱での暮らしや引揚船での様子については、『拓友（佐俣中隊の記録）』の中でも、「わが西安炭鉱遭難記」（47頁）、「コレラの思い出」（49頁）、「引揚のころ」（57頁）など、様々に語られている。上の語りは、

小侯氏の視点で語られた西安炭鉱での体験や引揚船中の様子である。なお、小侯氏が西安炭鉱に移動したのに対し、長井氏はシベリアの収容所に送られ、星野氏はソ連軍の命令で隊員と共に、満洲各地を転々とした。年次、隊員の年齢、敗戦時にいた場所、中隊長の判断等によって、戦後をどのように暮らしたかは異なってくる。

3.7 帰国後の暮らし

船を降りたのは8月の終わりでした。その後に乗った引揚げ列車は、一般人もいて、ぎゅうぎゅう詰め。通路に座っていました。列車が止まるときは半日も止まっていました。水はどうしてたのか、トイレはどうしてたのか、よく覚えていません。8月だから暑かったのは記憶しています。よく生きて帰ってきたと思います。ようやく安中の駅につきました。迎えはありません。クーラーも何もない古い家に着いた時には、おふくろがいました。おふくろにすがって泣きましたよ。おふくろも、「よく帰ったよ」と言って、わあわあ泣きました。その時おやじさんは、かまどづくりをして、いなかったけどね。家に帰ってきてからは、家の仕事を手伝いました。父の腕は本当によかった。父の手伝いをして生計を立てました。それが無い時は土建もやりました。農業もやりました。食べ物もつくりました。小作農家だったからね。さんざんやりましたよ。その後、会社に入り、10年ぐらい勤めましたが、3交代制で仕事が大変で、身体が持たないと思ってやめました。そして、一般人も車に乗れるといわれ、免許をとって、運送屋に入りました。運送屋も小さい会社だったから、何でも仕事をもらってくるので、仕事が大変でした。石綿を背負って、6トン車に詰め込む時に、それが身体に刺さるので、身体がかゆい、かゆい。お風呂に入っても、また同じ服を着るから、とてもかゆかったです。その仕事もやめて、今度は、布団屋に入りました。綿は軽くていいと思いましたが、綿も集めると180キロにもなって、大変でした。その会社で、25年間勤めました。

故郷に帰ってきてから、10年ぐらい経って、担任の先生が、私と吉田と岡田の3人を義勇軍にやったから、罪滅ぼしにと食事に誘ってくれました。その時は、担任の先生は泣きました。「悪かったよな」、「えらいおごとをさしたよな」と。その先生はもう亡くなりました。その当時、先生が涙こぼしたのを見て、私たちも「先生」といって泣きました。「先生、そんなことはないよ」と言い、先生は「悪かった、悪かった」と言っていました。結局、先生だって、仕方なしに、生徒を出せと言われたから、やったんです。そして、政府は、第二の関東軍をつくらうとしたんですよ。私は、中国で過ごしていた当時も、先生を恨む気持ちはありませんでした。

小侯氏が義勇軍に入隊したのは、現在の中学生の年齢に当たる14歳であり、日本に帰国したのは、現在の高校生の年齢に当たる17歳の時である。実家に戻り、母親と再会した時の様子はよく覚えていると話された。小侯氏はその後、家の手伝いをしながら生計を立てていくが、その間、入隊前の担任教師と再会している。

星野氏も入隊前の担任教師と再会している。星野氏によると、帰国後に学校に挨拶に行ったが、当時の担任教師は異動していて不在だった。のちに同級生が連絡をとってくれて、担任教師と再会することができた。再会時、その担任からは「ご苦労様だったね」と言われたという。その一言に対し、星野氏は「まあ、無事に帰れてよかった」と述べ、それ以上、担任教師との再会場面について話すことはなかった。

3.8 私にとっての義勇軍

私にとって、義勇軍はよかったと思います。仲間との絆がね。拓友会というをつくって、家族ぐるみの付き合いをするようになって、今も兄弟のように、兄弟以上になれたんだよ。義勇軍のつきあいというのは、本当によかったなあとと思う。最初の頃は、義勇軍に行ったということをいうのは嫌でした。ある程度たってから、言えるようになりました。自分の中でね。それはなぜかは分からない。40代、50代になって、仲間と合流して、みんな同じ気持ちだと分かり、俺たち立派なんだから自信もっていいんだぜと言い合えるようになった。それまでは、言えなかったよ。

小俣氏の「義勇軍はよかった」について、筆者が後日、改めて質問した時には、「孫にもさせたい」という意味ではないと言われた¹⁰⁾。このことから、義勇軍がよかったというのは、現地での仲間との絆の深さや、帰国後の家族ぐるみの付き合いを指していると考えられる。長井氏の場合、義勇軍は「精神教育だったね」、当時は「規則がうんと正しかった」、「義勇軍は精神教育が立派だったね」と話している。星野氏は、しばらく考えてから、「健康で帰れたし、いい修養になった」と述べている。このように、義勇軍体験は、個々の入隊者の人生を心理的に支えてきた様子が窺える。ただ、星野氏の場合、「いい修養になった」と述べた後、少し間を置いて、次のように語った。「ぼくは満洲に行きます。ぼくは大陸の土になります。かつて国策の名のもと、鋤の柄肩に海を渡っていった少年達がいた、その数8万6千530名、彼らはひたすら五族協和、王道楽土建設に、その青春を費やした、敗戦、戦争という極限の中で、彼らの多くは大陸の土と化した、三十年の歳月は流れた、彼らの前には一枝の花もない、少年たちの名は満蒙開拓青少年義勇軍、そういうふうに彫られていますけどね、まあ、その詩はほんとに、ほんとに我々（のこと）をいってくださいますね」。当事者にとっての義勇軍の意味は、一言では言い表し難いことを示唆している。



写真1 入隊当時の小俣氏



写真2 日輪兵舎（内原訓練所）

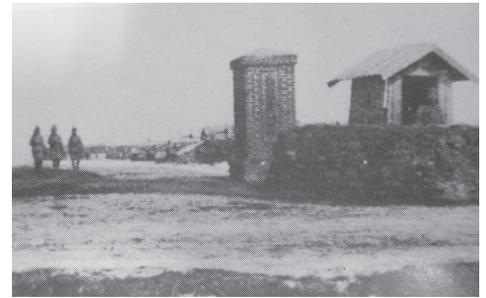


写真3 鐵驪訓練所 正門

※ここに掲載した全ての写真は、鐵驪拓友会（1982）より抜粋

4. おわりに

本稿では、群馬県が送出した義勇軍の中の佐俣中隊（戦後「鐵驪拓友会」）を取り上げ、佐俣中隊に関する書物とそこに記された佐俣中隊の概要や小俣喜一郎氏の文章を紹介し、その上で、小俣喜一郎氏のライフヒストリーを取り上げ、小俣喜一郎氏を通して、義勇軍に入隊する背景や過程、入隊後や敗戦時、敗戦後の義勇軍の様子について明らかにしてきた。

義勇軍に入隊する背景として家庭の暮らしが楽ではなかったこと、義勇隊入隊に「教師による宣伝」があったこと、入隊後は訓練の連続で、内原での食事が慣れなかったこと、渡満後も食事が慣れず、体調を崩す仲間が多かったこと、敗戦を迎え現地人の襲撃に合うもそれを撃退したこと、西安炭鉱に移りそこで働いていたこと、帰国する船で伝染病が流行り、海上で留め置かれたこと、漸く上陸を果たして列車に乗るも故郷までの道のりに苦労したこと、そして家に帰り母と涙の再会を果たしたことが語られた。また、帰国後10年を経て、義勇隊入隊を勧めた担任教師との再会し、教師が涙しながら詫びたことも語られている。

佐俣中隊には、現地で亡くなり、帰国できなかった隊員がいる。小俣氏の故郷には、そのような仲間はいなかったが、他郷の仲間からは、現地に渡った仲間の遺骨を家族に届けるのが本当につらかったこと、家族に泣かれてつらかったことを小俣氏は語っている¹¹⁾。義勇軍入隊のきっかけを作ったのは教師であっても、入隊後に還らぬ人となった友人の遺骨をその家族の元に届けるのは教師ではない。長野県では教師が義勇軍入隊を勧めた実態や背景について考察する取り組みが先進的になされているが¹²⁾、群馬県をはじめ、他県

でも取り組んでいかなければならない課題ではないだろうか。

小侯氏が所蔵する『拓友(佐侯中隊の記録)』には、次のような「あとがき」が記されている。「最後に一言申し上げたい。それは戦後二十年を終わった現在、日本の大陸経営は侵略行為だったという烙印を押されている。疑う余地のない事実でありましょう。(中略:筆者) 渡満した若干十五才前後の少年たちは、「五族協和」「王道楽土建設」を額面どおり受け取って敢斗したのであり、食料増産だ、挺身隊だと最後まで軍に利用されたあげく、ソ連軍侵入と同時に見捨てられた、いわば純真な隊員は日本の大陸経営にともなう(尻ぬぐいをやらされたというべきか)最大のギセイ者に外ならなかったのであり、いまにして真実の記録をまとめておかなければ義勇隊の歴史は誤解された尽、永遠に埋もれてしまうのであります」。戦後、義勇軍入隊者が自身の体験を語れる状況になかった時に、当時の状況や思いを綴った書物が作成され、戦後74年経ち、その書物もまた脚光を浴びることなく埋もれようとしている。群馬県の事例が示すように、当時の体験を語れる人が僅かとなった今、義勇軍の歴史や体験を記録に残し継承する取り組みが求められている。その意味で、小侯氏だけでなく、長井氏や星野氏を始めとする義勇軍入隊者の体験を記録すると共に、それらの体験記録等から、群馬県送出の満蒙開拓青少年義勇軍の特質を明らかにすることが今後の研究課題である。

謝辞

本研究を進めるにあたって、小侯喜一郎氏、長井竹男氏、星野輝義氏には、インタビューのご協力を頂きました。また、高橋勇夫氏や東宮春夫氏には、資料提供などのご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 群馬県拓友協会事務局長の高橋勇夫氏からの聞き取り(2019年11月5日、電話にて)
- 2) 『群馬拓友協会30周年記念誌』には、「昭和13年9月21日に内原訓練所に集合する」と記されている(群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌編纂委員会編:2004)
- 3) 星野輝義氏からの聞き取り(2019年11月1日、群馬県拓友協会にて)。なお、本稿における星野氏からの聞き取りは全て2019年11月1日のものであり、群馬満蒙開拓歴史研究会の東宮春夫氏、群馬県拓友協会事務局長の高橋勇夫氏が同席したが、聞き取りは筆者が行った。
- 4) 群馬県義勇軍連合会は、1968年(昭和43年)5月8日に結成された。同会は、群馬県出身の元義勇軍出身者を会員とする。1947年(昭和22年)頃より渡満年次別に拓友会が結成され、各会ごとに運営されていたが、各会間の連絡協調のため、連合会の結成が望まれ、1967年(昭和42年)5月に「義勇軍之碑」を建立し、慰霊祭を実施した機会に連合会結成準備会を設け、碑の維持管理、慰霊祭の例年執行ならびに各単位会相互の親睦を目的として、翌年に会が結成されるに至った。1968年当時は450人の会員がいた(群馬県復員援護史:1974)。
- 5) 小侯喜一郎氏からの聞き取り(2019年10月31日、小侯氏の自宅にて)
- 6) 小侯喜一郎氏からの聞き取りは、2019年10月22日、小侯氏の自宅にて行ったものである。なお、同席者に東宮春夫氏がいたが、聞き取りは筆者が行った。長井竹男氏からの聞き取りは、2019年11月1日のものであり(長井氏の会社にて)、同席者に東宮春夫氏がいたが、聞き取りは筆者が行った。長井氏の聞き取り内容は、全て同日のものである。
- 7) 小侯喜一郎氏からの聞き取り(2019年10月22日、小侯氏の自宅にて)。なお、聞き取りの際は、「生い立ち」、「家庭状況」、「義勇軍に行くきっかけ」、「内原訓練所に行くまで」、「内原訓練所での様子」、「渡満まで」、「渡満後の生活」、「敗戦前後の様子」、「帰国までの暮らし」、「帰国後の暮らし」、「義勇軍入隊を勧めた先生との再会の有無」、「小侯氏にとっての義勇軍」について筆者から尋ねている。また、聞き取り内容は、できる限り本人の言葉を使用するようにした。
- 8) 義勇軍の応募動機について、1941年(昭和16年)末の時点で調査したものがあつた、それによると、表5のような結果が見られるという。また、満洲開拓史刊行会(1961:318)によると「とくに教師の指

導のなかには、国の現状と将来が説かれ、義勇隊に応ずることによって国家目的に沿うことができることを説得され、青少年はそれに応じたものであると考えられる」と述べている。

表5 義勇軍に応募した動機と各人数

応募動機	教師の指導	本人の意思	父兄の奨め	友人の奨め	官公吏の指導	義勇隊の通信	その他	合計
人数(人)	3,422	2,496	429	179	164	78	744	7,217

* (満洲開拓史刊行会, 1961: 318) を基に筆者作成

- 9) 長井氏の場合、学校教員が修身の時間に、満洲の話をしていて話を話している。当時、「満洲はどこにあるのか知らなかったけれども、十町歩の土地がもらえる」など、当時は想像もつかないようなことを聞き、「こういうところに行ける勇気のある人は学校にもいるだろう」と教員に言われ、長井氏は「はい、先生、行きます」と言ったことを話している。その後、当時は「おっかないところだった」教員室に先生に連れられ、そのうちに、校長室にも連れて行かれ、校長先生から「君なら学校の代表にもなれるし、竹男君なら大丈夫だ」と言われ、校長先生から名前を覚えてもらって緊張したことや、後日、朝礼台にあがって、全校生徒の前で、校長先生から義勇軍に行くことを紹介された時のことを話している。また、星野氏の場合、1942年(昭和17年)の秋に、担任の先生から「放課後残ってほしい」と言われたことを話している。担任の先生が「義勇軍募集の話が来ている」といい、当時、星野氏は「たまたま級長していたものですから、級長だけは満洲に行ってほしい」と言われ、「先生が先に泣いちゃい」、「それじゃ、行きましようってんで、私も泣いちゃった」、「そんなことで級長だけは行ってほしいんだということで、はい、じゃあ、親とも話さなくちゃなんないけど、行きましよう、っていうことで話はそんな方向に行きましたですね」と話している。
- 10) 小侯喜一郎氏からの聞き取り(2019年10月31日、小侯氏の自宅にて)
- 11) 小侯喜一郎氏からの聞き取り(2019年10月31日、小侯氏の自宅にて)
- 12) 長野県では、義勇軍シンポジウム実行委員会により、2019年11月現在、第1回から第9回までの『満蒙開拓青少年義勇軍』シンポジウム記録集』が発行され、2019年10月5日には、第10回シンポジウムが長野県松本市で開かれた。同シンポジウムの実行委員が関わる書籍として、長野県歴史教育者協議会編(2000)も出版されている。

引用・参考文献

- 群馬県県民生活部世話課、『群馬県復員援護史』, 群馬県, 1974, pp.794-795
- 群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌編纂委員会編、『群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌 希望に満ちた満蒙開拓と終戦』, 群馬拓友協会, 2004
- 群馬満蒙拓魂之塔編集委員会編、『拓魂ぐんま』群馬満蒙拓魂之塔建立委員会, 1974
- 埼玉県県民部 県史編さん室、『新編 埼玉県史別冊 曠野の夕日 埼玉県満蒙開拓青少年義勇軍の悲劇』, 埼玉県史刊行協力会, 1984, pp.277-290
- 白取道博、『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』, 北海道大学出版会, 2008, p.1
- 鐵驪拓友会、『拓友(佐保中隊の記録)』1965
- 鐵驪拓友会、『満洲開拓青年義勇隊 佐保中隊写真集』1982
- 長野県歴史教育者協議会編、『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』, 大月書店, 2000
- 満洲開拓史刊行会、『満洲開拓史』, 1961, pp.316-317

